

JICA 海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

4

2026
APRIL



「体験的な学習指導」を念頭に、現地教員と共にパソコンの指導や視覚教材を用いた理科の授業を実施。教員、児童、私自身も含め、笑顔で授業を楽しみました（ガーナ）



特集

協力隊事業を応援してくれる方々を知ろう！

各界の応援者に伺う協力隊の魅力

派遣国の横顔「ネパール」

農業分野から始まり他分野に広がる貢献
内戦時も続いた派遣に国民からも高い評価



「日本のプロ野球でプレーしたい!」という ベリーズの若者の夢が実現できるよう支援しました

しいば かずひろ
椎葉一勲さん (ベリーズ/野球/2024年度1次隊・京都府出身)

野球を愛するベリーズの若者たちを支援し、その中の1人が日本のプロ野球でプレーするという夢を実現しました。2024年の赴任当初、配属先である野球連盟は代表者1人のみとまだ小規模で、国内には野球チームや練習場、さらには野球道具を購入できる所もないことがわかりました。そのような環境で、私は何から手をつければよいのか分からず、戸惑いを感じていました。

ベリーズでは野球は普及していませんが、ソフトボールは盛ん。そこで、私は最大都市ベリーズシティにあるソフトボール場を見に行きました。そこで思いがけず、球場の隅の使われていないスペースで10人ほどの若者たちが野球の練習をしている姿を目にしたのです。うち何人かははだしで、道具はかなり傷んでいました。彼らはテレビなどで見たメジャーリーグ選手などに憧れ、チームも専用の練習場もないのに、毎日、練習しているようで、私が野球の指導者だと知ると大喜びしてくれました。それからは彼らのサポートが私の主な活動になりました。

彼らの中でずば抜けていたのが、デルバート・ハインズ選手です。左投げピッチャーで投球にパワーがあり、体もしなやかで将来性を感じました。漁師として家族を支えている19歳の青年で、毎日、漁の後に潮まみれのTシャツ姿で球場へやって来ます。メディアで見た日本人メジャーリーガーの“礼儀正しい振る舞い”に感銘を受け、「いつか日本でプレーしたい!」という夢を持っていました。

彼のプレー動画を撮影し、高校球児時代からの親友である元中日ドラゴンズ選手の石川 駿さんに送ったところ、彼も「この子はモノになる!」と確信。私たちはデルバー

ト選手を日本に送るために動き始めました。私は彼の動画をSNSで発信し、石川さんは知人を通じてプロ野球チーム「旭川Be:Stars」(※)へ打診してくれました。

しかし、最大の壁は日本への渡航と滞在に必要な資金でした。私はベリーズのテレビに出演して寄付を呼びかけたり、クラウドファンディングを試そうとしましたが、うまくいきませんでした。そんな中、在ベリーズ日本国大使館主催のパーティーに出席した際、同席していたベリーズの女性に話したところ、「ベリーズの若者のために頑張ってくれてありがとう! 私が支援する」と言われました。彼女は企業経営者で、とても幸運な出会いでした。

25年5月、デルバート選手は旭川Be:Starsに入団し、プロ野球選手として試合出場を果たしました。我流で野球をしてきた彼にとって、日本のプロ野球のレベルは桁違いに高度で、初めは困惑したようです。ともあれ、私もベリーズから試合の様子をテレビ中継で観戦することができましたが、彼が日本の球場に立つ姿を見た瞬間は、胸に迫るものがありました。

3カ月間の契約期間を満了し、ベリーズに戻った彼は、若者たちに「夢はかなう」というメッセージを伝える存在となり、野球を始める子どもも増えています。デルバート選手が日本でプレーできるよう私が支援したのも、彼にベリーズの野球をリードしていく存在になってほしいからです。

ベリーズでは貧困など経済的な課題も多くあり、野球を軸として若者たちの“居場所”が生まれることで、非行に走ることなく、彼らの未来が健全で望ましい方向に変わっていくことを願っています。

※旭川Be:Stars…日本野球機構(NPB)に所属しない独立リーグ「北海道ベースボールリーグ(HBL)」に所属するプロ野球チーム。北海道旭川市を拠点とし、地域密着型の野球チームとして活動している。海外から来日した選手が多数プレーしていて、同チームから埼玉西武ライオンズに入団した外国人選手もいる。



上：デルバート・ハインズ選手(右)は2026年のシーズンも旭川Be:Starsとの契約が決まり、4月から9月まで日本国内でプレーする予定
左：野球に打ち込んでいる仲間たち。椎葉さんは練習の“サポート”に徹している。「彼らは野球が楽しいから、自主的に練習し上達していきます。それこそスポーツが本来あるべき姿だと思います」



COLUMN — 表紙によせて

小学校教育隊員としてガーナ農村部の学校で活動する中、寄付で建ったICTルームを活用できる教員がないことから、機器の使い方や授業方法を指導しました。特に、詰め込み型ではない「体験的な学習指導」を念頭に、現地教員と共にパソコンの指導や視覚教材を用いた理科の授業も実施。教員、児童、私自身も含めて笑顔で授業を楽しめたことが印象的で、皆の幸せが増えることにやりがいを感じました。

桑名佑典さん（ガーナ/小学校教育/2023年度1次隊・兵庫県出身）

国別索引	掲載ページ
ガーナ	1, 13
ケニア	13
ザンビア	18, 19
セネガル	11
セントルシア	24
チュニジア	22
ニカラグア	12
ネパール	4, 5, 6, 7
バヌアツ	8, 16
パラグアイ	23
ペリウ	2
ボリビア	12

職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	6, 11, 12, 13, 22
村落開発普及員	12, 18
プログラムオフィサー	13
果樹栽培	7
経営管理	24
マーケティング	16
理数科教師	4, 5
野球	2
サッカー	8
小学校教育	1
デザイン	19
家政	23

出身都道府県別索引	掲載ページ
秋田県	23
福島県	8
栃木県	5
埼玉県	6, 7
東京都	4, 24
静岡県	22
京都府	2
兵庫県	1, 16
広島県	18

CONTENTS

2 JICA Volunteers' Reports

3 CONTENTS／索引

4 知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから
派遣国の横顔 [ネパール]

8 お悩み相談
アドバイスを聞きました！

9 [特集]
協力隊事業を応援してくれる方々を知ろう！
各界の応援者に伺う
協力隊の魅力

16 スキルや意欲で道を開く
就職ストーリー

18 派遣から始まる未来
先輩隊員たちの社会還元

20 INFORMATION
— JICA 青年海外協力隊事務局からのお知らせ

21 JICA 海外協力隊派遣現況

22 あの日、地球の、あの場所で。

23 隊員めし — 任地の食生活に彩りを！

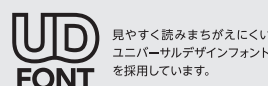
24 公開！私の派遣国生活 [セントルシア]

『クロスロード』（通常号）は、JICA 海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に9回発行しています。

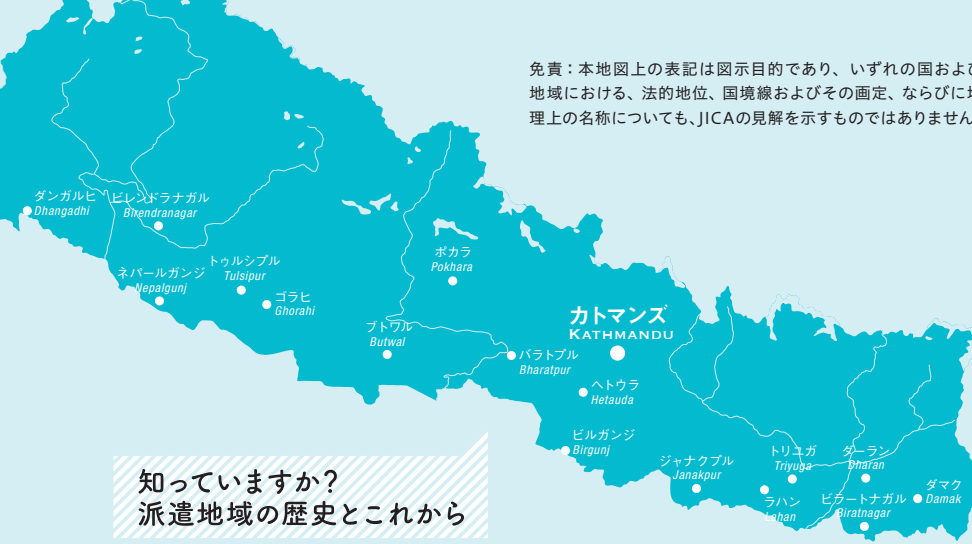
【凡例】 JICA 海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協力子さん（ケニア/環境教育/2026 年度1次隊）
氏名 派遣国 職種 隊次

JICA 海外協力隊には、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。



免責：本地図上の表記は図示目的であり、いずれの国および地域における、法的地位、国境線およびその画定、ならびに地理上の名称についても、JICAの見解を示すものではありません。



知っていますか？
派遣地域の歴史とこれから

派遣国

の Profile of the partner country of JOCV 横顔 〈ネパール〉

農業分野から始まり他分野に広がる貢献
内戦時も続いた派遣に国民からも高い評価

Text = 工藤美和 写真提供 = ご協力いただいた各位

お話を伺ったのは



い い づ かけん い ち ろ う
飯塚健一郎さん

(ネパール/理数科教師/1997年度2次隊・東京都出身)
JICAネパール事務所次長。1997年12月に協力隊員としてネパールの極西部の小中学校で理科と算数を教えた。2001年に国際協力事業団(現JICA)へ入職し、東京国際センター総務課、中東・欧州部アフガニスタン支援チーム、ネパール事務所、青年海外協力隊事務局海外業務調整課、駒ヶ根訓練所などを経て、23年から現職。

今年はネパールと日本が国交を樹立して70周年になります。その間、日本は主要援助国の一つとしてネパールの発展に協力してきました。

協力隊派遣は、中南部ナラヤニ県に東京農業大学が設立した実験指導農場の要員だった同大卒の3人が、1970年9月に「日本青年海外協力隊員」となった時から始まりました。90年代後半までは山岳部を含め東西に長い国土の広い地域に隊員が派遣され、96年から約10年間続いた内戦下でも活動地域を制限しながら継続。コロナ禍による一時中断を除いて、1,400人を超える隊員が活動してきました。長期間にわたり派遣を継続できている背景には、ネパールの人々が優しく穏やかで、比較的治安が良いことが挙げられます。不便もある生活を送りながら、地域に受け入れられて活動する隊員たちの姿は人々の印象に残り、高く評価されてきました。

農業と教育の2分野が派遣の中核ですが、農業は自給自足のための技術支援を中心とするものから、付加価値がある農産品の開発・販売へと転換しつつあり、教育については初・中等学校で教員の一人として教壇に立つ活動から、近

ネパール
Nepal



ネパールの基礎知識

面積：14.7万km² (北海道の約1.8倍)
人口：2,969万4,614人 (2023年、世界銀行)
首都：カトマンズ
民族：パルパテ・ヒンドゥー、マガル、タルー、タマン、ネワールなど
言語：ネパール語
宗教：ヒンドゥー教徒 (81.3%)、仏教徒 (9.0%)、イスラム教徒 (4.4%) ほか

※2025年10月14日現在
出典：外務省ホームページ
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nepal/index.html>

派遣実績

派遣取極締結日：1970年2月2日
派遣取極締結地：カトマンズ
派遣開始：1970年9月
派遣隊員累計：1,466人
※2026年2月28日現在
出典：国際協力機構 (JICA)



ヒンドゥー教寺院やかつての王宮などネパールの見どころは数多い。写真はカトマンズから程近い「チャンドラギリの丘」から眺められるヒマラヤ山脈の景色

年は算数教育のレベル向上や体育などの教科に焦点を置いた派遣へと変化しています。

2015年にネパールを襲った大地震からの復興に伴いインフラ開発や経済発展が進む一方、都市と地方の格差が拡大し、依然として貧困層とされる人々も少なくありません。今後も同国が抱える課題に合わせた職種の隊員を派遣していきます。

自然に目を向けると、ヒマラヤ山脈から南部の平地地帯まで国土は変化に富んでいて、首都カトマンズからも時折、ヒマラヤが望めます。文化も多彩で世界文化遺産も多数あるので、今後、当国を訪れる方や隊員となる方は、ぜひネパールを楽しんでください。活動ではネパールの人々を敬いながら寄り添い、焦らず地道に取り組むことが大切だと思います。

山岳地域での教育、首都の環境問題、
名産の果樹栽培など、広い分野で
ネパールの発展に貢献する隊員たち



はん だ よ し お
半田好男さん
ネパール/理数科教師/
1991年度1次隊・栃木県出身

PROFILE

大学卒業後に協力隊に一度合格するも高校教員になり、4年間勤めた後に現職参加で協力隊に。理数科教師としての活動に加え、成人向け識字教室を開く。任期満了後に現地教員や村人とNGO団体ディーヨ・フォーラムを組織し、日本で教員を続けながら30年余り支援を継続してきた。活動は学校施設建設や職業訓練、障害者支援へと拡大したほか、長野県駒ヶ根市とネパールの交流・国際協力にも発展した。

大人を対象に識字教室を開講し 帰国後も30年以上続く活動の原点に

ネパールの山岳地域の人々の教育・自立支援を30年以上続けている半田好男さん。原点は、理数科教師隊員として配属されたトカルパ村にある。カトマンズから北東にバスで5時間、谷あいのバス停から山を3時間登った先にある2,000m級の山全体が村の土地で、急峻な山肌^{きゅうしゅん}に段々畑が連なり、上部に中心集落がある。電気も水道もない自給自足に近い生活は経験がなく衝撃的だった。配属先近くの家に間借りし、水場から水をくみ、薪で煮炊きする生活が始まった。

「店もなく、米やミルクなどは村人から分けてもらいました。支援するつもりで来たけれど、逆に村人に支援され『生かされている』と感じ、恩返しをしたいと思います」

活動先のバグ・バイラブ小中高校の授業は暗記中心だった。半田さんは6～10年生の理科を担当。現地教員と共同で授業を行い、実験を導入して授業改善を目指した。冷蔵庫がないため自然に降った霜^{ひょう}を生徒たちと集め凝固点降下について教えたり、谷の向こうから大声で呼ぶ人の声がこちらに聞こえるまでに時間差があるという日常体験を通じて、音が伝わる仕組みを説明した。

生徒数や男女比は学年によって異なるが、誰も村の学校に通う子どもの人数を把握していなかった。そこで半田さんは校長に掛け合い、村内の学校すべてを訪問し村全体の生徒数を調べた。すると、2年生は1年生の4割に減り、10年生は1年生の1割しかいないと判明。女子に限ると1年生は

識字教室に通う女性たちは1本の鉛筆を大事に使ってノートの隅から隅まで文字の練習をした。「彼女たちの白いノートは、農作業で手に付いた土や汗、かまどの煙など、日々の労働の中で色や匂いが染み付いていきます」



175人在籍していたが、10年生は2人しかいなかった。その理由は貧困のほか、子どもが家事や仕事の担い手になっていることや、教育に対する親の認識不足などが推測された。

半田さんは10年生に顔つきの違う男子生徒がいることに興味を持った。離れた集落から通うパハリ族の生徒だった。パハリ族は村では3番目に人口が多いが、10年生には彼1人しかおらず、パハリ族の最高学歴者であった。なぜ彼だけは学校に通い続けているのかと家庭訪問をすると、父親が村の外で働き識字教室で学んだ経験があることを知った。「教育を受けた親は認識が変わり、子どもを学校へ通わせるようになる」。そう仮説を立てた半田さんは、同僚の先生たちに学校調査の結果を示し、就学率向上のために生徒の親を対象にした識字教室の開催を訴えた。村に赴任してまだ2カ月程度、「外国人の提案を受け入れてくれるだろうか」と心配したが、一人の同僚が「自分もそう思う」と申し出てくれて、二人で夜間の識字教室を開くことになった。その教員は、村に小学校しかなかった時代に苦勞して教員になった人で、教科書や教室の手配に奔走してくれた。

女性や、廃止されたカースト制度で低い地位にいた人を優先的に学べるよう配慮すると、10代から50代の女性が集まった。重労働の疲れがある中、松明^{たいまつ}を手にも暗く急な山道を歩いてきて熱心に学んだ。半田さんは学校での活動後、識字教室に行き、病気への対処法など生活改善に役立つ内容も教えた。「1カ月もたつと、最初は恥ずかしがって小声で話していた女性たちが、顔を上げ、声が大きく、表情が明るくなって、互いに教え合ったりするようになりました。そのうちの一人から、『真っ暗だった心の中に光が差し込んだようだ』と言われ、素晴らしいことが起きていると感じました」

半田さんは2年目からカトマンズの教育省に活動先を移し、教科書改訂や教員研修に当たることになっていた。トカルパ村を離れる日が近づくと、「識字教室を続けてほしい」との声が多く寄せられた。識字教室は村人と日本の有志の協力を得て教室数を増やして継続することができ、半田さんも週末、カトマンズから通って支援した。

日本への帰国後には識字教室を継続できるよう活動先の校長に代表を務めてもらいNGO団体ディーヨ・フォーラムを立ち上げ、日本で教員として働きながら支援を続けてきた。

おぐらさとみ
小口聡美さん

ネパール/コミュニティ開発/
2014年度1次隊・埼玉県出身



PROFILE

中学時代から国際協力と教育に関心があり「学校の先生になり協力隊に参加する」という夢を持つ。アメリカの大学院で平和教育を専攻し、カンボジアでのインターン、外資系企業勤務を経て、埼玉県さいたま市の英語教員に。5年後に現職教員特別参加制度を利用して協力隊へ。帰国後は復職し中学校に3年勤務後、さいたま市教育委員会へ異動し、英語カリキュラムの策定や国際理解教育などに従事している。

ごみ問題が起きていた古都で
子どもたちに分別や美化習慣を啓発

2014年にコミュニティ開発隊員の小口聡美さんが配属されたキルティプール市は、ネワール族(※)の文化と伝統が残る静かな街だが、カトマンズのベッドタウンとして人口が増え、ごみ問題が深刻化していた。廃棄物は収集車が回収して約30km離れた埋め立て処分場に運ぶが、市の予算不足から収集・運搬が追いつかず、ごみ削減が課題になっていた。「ネパールでは過去のカースト制度による職業固定の名残もあって清掃は清掃業者が行うものとされ、また、多くの大人は自然分解される素材を使っていた時代の感覚のまま、プラスチックのポイ捨てにも抵抗がないようでした」

小口さんは市役所の一般廃棄物管理課に所属し、教員経験を生かして市内の学校を対象に環境教育を行った。内容も、教員研修の実施や授業で取り上げてもらうなど、学校ごとの意欲や予算に合わせてアレンジした。ある学校では日本の廃棄物管理の事例を伝え、教員と協力して週1回の清掃時間を設定。美化委員会を立ち上げて校内の美化チェックやごみ箱設置による分別管理を行うよう促し、清掃活動が定着するよう頻りに学校に通い見守った。朝礼で清掃や分別を呼びかけ、放課後には生徒たちと一緒に教室を回ってチェックをし、記録を残した。さらに優秀なクラスを表彰し、分別したごみを資源として売却した。



小口さんは時には1時間以上歩いて学校を巡回し環境教育を行った。写真は新聞紙で作るエコなごみ箱の作り方を教えた時の一枚

「特に低学年の子どもたちの変化は大きなものがありました。『学校がきれいだと気持ちいい』『ごみを片づけたら遊具が使えるようになって嬉しい』と感じてくれて、ポイ捨てしている子がいたら注意し、分別も行うようになりました。さらに町で児童の親から家庭でもごみの捨て方を話していると聞いて、幼い時期での習慣形成が重要だと感じました」

活動に手応えを感じる一方で、やり場のない思いを抱えることもあった。時間が守られないことや決まったことが実施されないことがたびたびあり、ストレスとなった。ある時、教員向け研修を行う予定で準備をして待っていたが誰も現れなかった。窓口となった先生は「いい研修だね」と参加者集めを確約していたが実際は誰にも伝えておらず、小口さんは裏切られた気持ちになった。日本での研修経験があり協力隊にも理解のあるカウンターパートに相談すると、「ネパールだから仕方ないよ」と言われた。

「日本のように予定どおりにはいかないという慰めだったので、その時の私は同僚たちの何かに取り組みもうとする意欲の低さと捉え、いら立ち、悲しくなりました」

15年4月25日、ネパールはゴルカ郡(カトマンズより西へ約80km)を震源とする大地震に見舞われた。キルティプールでも歴史的な建造物が多数倒壊。多くの犠牲者が出て、電気も水道も物流も止まり、小口さんも不安のただ中이었다。自分や家族のことで精いっぱいになってもおかしくない状況の中、人々は「なんとかなるよ、大丈夫」と不足しているお茶や食事を惜しげもなく出してくれ、避難場所まで気にかけてくれた。知人だけでなく、見知らぬ人も同様だった。小口さんが地域の学校で活動し、伝統的な祭りに参加する姿を覚えてくれていたのだ。

「それまでイライラさせられてきた、楽観的でいいかげんさもある彼らの性格ですが、被災時にはそれに救われました」

どんな時も人を思いやるネパールの人々のゆとりある生き方に小口さんが引かれていく転機になった。

ミカン栽培のノウハウをYouTubeで公開し
日本の技術を応用した保存実験を実施

2024年8月から派遣されている川尻 渚さんは、ネパール中部のプタリバザール市役所農業開発課で農家への技術支援を行っている。同市はミカンの名産地。川尻さんは果樹栽培隊員としての派遣が決まった後、1年間、和歌山県海南市でミカン作りについて学んでから赴任した。

ネパールでは農業が主産業だが、それだけでは生計が成り立たず、家族を支えるため多くの人が海外に出稼ぎに行く。川尻さんの配属先へ相談に来るのは、帰国して農業を再開した人や、海外からの送金以外の収入を増やそうとミカン栽培を始めた人が多い。活動していて気づいたのが、自己流の作業で栽培がうまくいかない農家がいる、農業

※ネワール族…カトマンズ盆地を中心に古代から暮らしてきた先住民族。独特の都市文明を築き、建築や宗教、言語などの文化を発展させてきた。現在、ネパール国内で6番目に人口の多い民族とされている。



川尻さんの活動の柱の一つとなるミカン収穫後の保存方法について、現地の農家の協力を得ながら実験している



かわじり なぎさ
川尻 渚さん

ネパール/果樹栽培/
2024年度1次隊・埼玉県出身

PROFILE

幼少期に国際協力に興味を持ち、高校時代はフィリピンのセブ島を支援する学生NGOで活動。JICA海外協力隊を目指し、JICAとの連携派遣協定を結んでいる拓殖大学の国際学部国際学科農業総合コースに進学。卒業がコロナ禍に重なったため、1年余り飲食業で働く。ネパールへの派遣が決まった後、和歌山県海南市の伝統的な蔵出しミカンがある地域で1年間、栽培から保存方法までを学んだ。

や肥料を使うにもパッケージにある説明文を読んで理解することができない人も少なくないことだった。

遠方から相談に訪れる農家も多いが、人手不足で十分に対応できず、門前払いされる例も出ていた。同期の果樹栽培隊員の配属先である園芸開発センターにも気候や環境に合った知識や技術を持った専門家がいるものの、それらを本来必要とする農家に情報が届いていない。

「私たち協力隊員が間に入って技術者と農家をつなぎ、帰国後も残るような活動をしたいと思い、SNSで見てもらった動画作成を始めました」

ネパールでもスマートフォンが普及して生活の一部となっているため、動画共有サイトのYouTubeなどに投稿すれば見てもらいやすい。動画ではカウンターパートらにミカンの接木方法などについてネパール語で説明してもらい、監修者としてクレジットも入れた。あえて字幕をつけずに目と耳から情報を伝えることで読解が苦手な農家に直感的に理解してもらえるようにした。ミカンに限らず、ブドウの品質向上や高級食材として人気が出てきたシイタケの原木栽培方法など、農家からの要望の多いテーマの動画も作成して投稿している。

「周囲の農家の人たちから、『次回はこの問題を動画にしてほしい。一緒に畑に来てくれ』と言われることが増えました」

これまで作成した動画は12本。任期満了となる今年8月までに1本でも多くの動画を作成して残したいと考えている。

現在、もう一つ取り組んでいるのがミカンの保存実験だ。プタリバザール市では、ミカンを長期保存し収穫期以外の時期にも販売したいと市内に大きな冷蔵庫を導入したが、実際にミカンを保管したところ、すべてが腐敗し廃棄となる問題が起きた。その原因を探り、再発を防ぐための実験だ。派遣前に学んだ和歌山の「蔵出しミカン」(完熟ミカンを土壁の貯蔵庫で保存・熟成させる)の方法を応用した。

市内のミカン農園のサポートを得て大型冷蔵庫や実験用ミカンを提供してもらい、実験用ミカンの収穫や作業は農業分野の隊員たちに手伝ってもらった。保存結果を比較するため、重曹による防カビ・防腐処理の方法や保存箱の素材などサンプルの条件をさまざまに設定した。川尻さんは2週間に一度、保存状況を見にいき、保存開始から3カ月後の今年3月に結果を調べる。どのような結果が出るのか予測はつかないが、報告書にまとめて配属先に残すつもりだ。

活動の舞台(裏) — 人々の絆を深める祭りと踊り

多民族、多宗教のネパールにはたくさんの祭りがあり、家族や親戚、友人と過ごす。ネパール最大の祭りであるダサインでは約15日間の期間中、職場や学校が休みになり、人々は全国から帰省して集まる。

キルティプールで伝統的なダンスを習った小口聡美さんは、ダンスの背景にある祭りや文化について教えてくれた教室の仲間が、何でも話せる大切な友人になった。年に一度のキルティプールジャトラという祭りでは集落でも有名な踊り手であるカウンターパートの父親に誘われ、山車と共に集落を踊り歩いた。「『ダンス良かったね、自分も昔習っていたんだよ』と人々が話しかけてくれて、集落での人間関係が広がっていきました」。

ティハール(光の祭り)が自分にとって印象的だったと語るのは飯塚健一郎さん。「家の内外にろうそくをともし、バイティカという儀式で女性が男性のおでこに印をつけます。その儀式を経た後、私はホームステイ先の家族の一員として受け入れられ、今まで入れなかった台所で一緒に食事をするようになりました。精神的なつながりを大切にしている人々なのです」。

右: ティハールが行われている期間中は街中にも多くのろうそくがともる
下: 伝統的な衣装を身にまとい踊る小口さん



お悩み相談

アドバイスを聞きました!

今月のお悩み

語学力不足でうまく意図を伝えられず、
指導の仕方に悩んでいます

(中南米/ソフトボール)

小学校を巡回して、ソフトボールを教えています。私の派遣国ではソフトボールが普及途上にあるため、まずはどんなスポーツなのか体験してもらうことから始めていますが、まだ赴任したばかりで現地の言葉が拙いこともあり、基礎の基礎から伝えていく上でどうアプローチすればいいのか悩んでいます。



小林先生からのアドバイス

言語に依存しないよう、指導の仕方を工夫してみましょう
活動の現場では言葉が多過ぎないことも大切

海外で活動するにあたって、言葉が伝わらない状況はとても不安でしょう。ですが、スポーツは言語を介さなくても意図を伝えやすい強みがあるので、深刻に悩み過ぎる必要はないように思います。大前提として語学力があるに越したことはありませんが、「走る」「投げる」「跳ぶ」などの基本動作は言語以前の概念ですし、「勝って嬉しい」「負けて悔しい」といった感情も言葉を超えて伝わります。私もサッカー選手として活動していた当時は「Like this!」「Let's go!」を連発して動作を見せながら教えていたのですが、赴任したばかりの時期は、デモンストレーション中心に取り組むのは一つの手です。

また、会話に頼り切らない指導設計をするという考え方もあります。例えば、信州大学の体育科教員を養成する課程の先生の手法で、小学生にボール投げを指導する際、まず紙飛行機を飛ばす遊びから始めるというものを見たことがあります。飛ばす時の動きが投げる動作の土台になるのですが、そうした方法であれば複雑な説明は必要ありませんよね。私が指導したバヌアツのナショナルチームの選手は、シュート練習の時にいくら技術を説明してもドカンドカンとむやみに蹴って満足しているので閉口したのですが、ペットボトルを的にして2チームの対抗戦形式にしたところ、本気で狙って打つようになりました。

そのように、現地の人が普段している動作などとひも付けたり、特定のスキルに焦点を当ててゲーム化したりすると、言語や

文化を超えて理解されやすいわけです。これができる人は途上国の現場では強いと思います。

そもそも、たとえ語学がよくできたとしても、指導対象の人たちに長々と説明すること自体、考えものでもあります。面と向かってあれこれ言われても頭に残りませんから、短く簡単な言葉でポイントだけ伝えることが肝要なのです。実際、世界レベルのスポーツ指導者は選手とミーティングをする前に、その日は何をどういう順序で選手に話すのかスタッフ間でしっかり検討し、最低限の言葉で伝えるそうです。もちろん端的に話すにも語学力は必要ですが、同時に、語学ができれば万事解決というものでもないのですから、ぜひ自分に適したやり方を見いだせるように試行錯誤してみてください。

今月の先生

こばやし つとむ
小林 勉さん

バヌアツ/サッカー/
1995年度1次隊・福島県出身

筑波大学卒業後、同大学大学院修士課程修了。協力隊員としてバヌアツで活動し、帰国後は名古屋大学大学院にて国際開発学で博士号取得。信州大学教育学部専任講師、中央大学総合政策学部准教授を経て、2014年より同学部教授。研究と実践の両面から、スポーツを地域・政策・若者・国際協力と結びつけるアプローチを展開。専門は国際協力論、スポーツ社会学、スポーツ政策論。著書に『スポーツで挑む社会貢献』(創文企画)ほか多数。



Text = 飯淵一樹(本誌) 写真提供 = 中央大学広報室

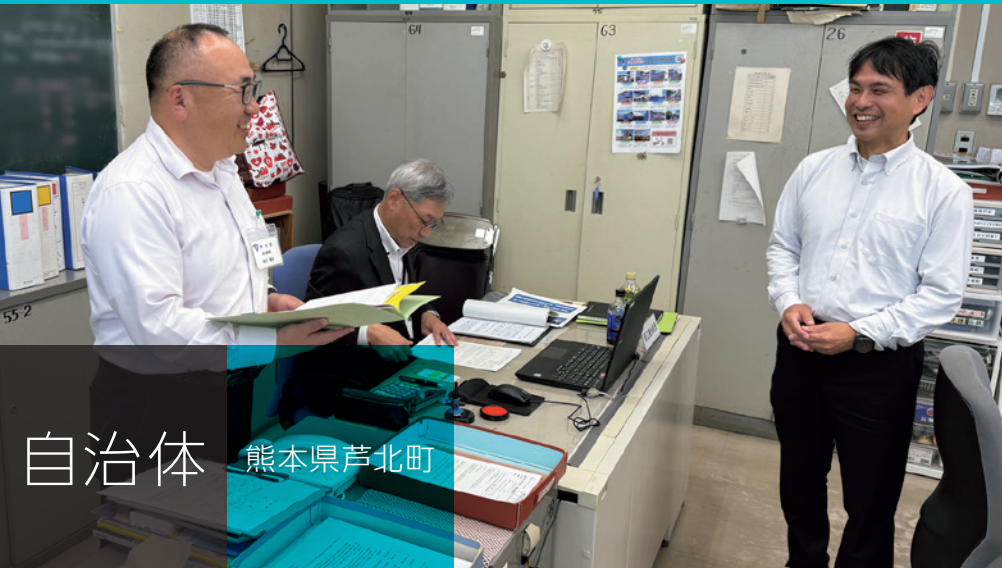
協力隊事業を
応援してくれる方々を
知ろう!



企業

ヤマハ発動機
株式会社

各界の応援者に伺う 協力隊の魅力の



自治体

熊本県芦北町

2025年に発足60周年を迎えたJICA海外協力隊。その事業は、現地へ赴任して活動する隊員たちだけでなく、日本国内からその理念に協賛して“応援”してくれる多くの方々によっても支えられています。26年度の初めとなる本特集では、協力隊事業・協力隊OVの応援者たる産官学各界の皆様にも、OVと関わって感じている印象や、協力隊事業の意義についての考えを伺いました。

Text=飯淵一樹 (P9-11)、大宮冬洋 (P12-13)、秋山真由美 (P14-15)
写真提供=ご協力いただいた各位



大学

国立大学法人
鳴門教育大学

ヤマハ発動機 株式会社



現地との“仲介者”としての 協力隊経験者たちに これからも期待していきたい



海外市場開拓事業部
企画推進部 部長

よねざわ としよし
米澤俊義さん

【ヤマハ発動機株式会社】

二輪車や電動アシスト自転車などのランドモビリティ事業、ボート・船外機などのマリン事業、ドローンなどのロボティクス事業など多軸に事業を展開。近年は、途上国・新興国向けに浄水装置を導入する事業も行う。ODA（政府開発援助）などに係る協力にも長年携わるほか、これまでに100人以上の協力隊経験者を社員として採用している。

協力隊OVの資質として 評価している点は？

私は昨年から当事業部に在籍しているのですが、協力隊OVか否か、社員をパッと見て違いを感じるかといわれると、実のところわかりません。新卒で入社して勤務している社員でも、特にアフリカなどの開発途上国で仕事をしたいと当事業部を希望する方がいます。そうした人はある種“変わり者”という点が共通しているかもしれませんが、積極性の点は協力隊OVと大きくは違いません。ただ、協力隊経験のある社員からは、現地社会への考察の深さを感じます。

弊社では直接に子会社を展開している欧米やASEAN諸国と別に、約140の国と地域にヤマハ発動機の看板を掲げる代理店を設けています。そうした現地の店を特約店と呼んでいるのですが、現地の人々とのコミュニケーション不全は往々にして生じます。そのような場面で、「彼らはこう考えるから、このように伝えないとわからないのでは」と、相手の立場に立って物事を考える姿勢が協力隊OVには多く見られます。それは単に語学試験のスコアが高ければできることではありません、



ケニアで現地の顧客と接する協力隊OVの社員

JICA 海外協力隊OVを 多く採用してきた背景は？

弊社は1955年に楽器のヤマハ株式会社から派生して設立されましたが、その創業時から世界の人々の暮らしを豊かにしたいというビジョンが根底にあります。60年代にはアフリカ向けにオートバイの輸出を始めていて、社員が実際に出張して現地の人々の暮らしを見て回っていたそうです。弊社では現在も「モビリティが世界を変える」という言葉を掲げていますが、そうした点が、そもそも協力隊の方々との親和性を持っているのだと思います。70年代に初めて協力隊OVを採用して以来、数多くの方々に入社いただいておりますが、近い志があるからこそ、ヤマハ発動機を選んでいただけるのかもしれませんが。また、弊社としても、協力隊を経験した方ならば、ぜひおいでいただければと考えています。



オートバイや船外機などのモーター産業のほか、海外市場開拓事業部では施設やコミュニティ向けの浄水装置の販売・導入にも力を入れている

やはり現地の人々と同じにおいや音を五感で知ってきた経験や感覚は、何物にも代え難いと思います。

もちろん、弊社として決めたことに現地の側から従ってもらう姿勢は必要で、①ヤマハ発動機のやり方を伝え、管理する駐在員、②本社から短期的に出張して回り、各国の状況を横断的に知る本社の社員、③協力隊OVといった3種類くらいの人材がいると、組織がうまく回るという印象があります。

特に協力隊OVの取り組み方で印象的なことは？

協 力隊経験ゆえなのか定かではない面もあるのですが、当事業部の藤本顕允さん（セネガル/コミュニティ開発/2014年度3次隊）には、優れていると個人的に感じる点があります。弊社では現地の特約店の方々が単に日々のビジネスを行うだけでなく、自発的に振り返りや改善もできるよう成長を促すことを掲げています。そのため、日本から赴くテリトリ営業担当者の役割・責任として、特約店の人々と目線を合わせた活動が主体となります。こうした直接のビジネスパートナーとのひざ詰めの会話も非常に大事なのですが、藤本さんなど

協力隊OVの場合、JICAや大使館、国連機関などの公的機関を気負わずスツと訪ねて情報を集めるなど、活動や発想の自由度が高い印象です。社会で官民間問わずいろいろな組織が活動している中、横のつながりを意識してうまく連携できれば、商売の広がりを持たせられるでしょう。そうした認識の有無は差が出るところで、それは協力隊でJICAなどの存在が身近にある世界を経験したおかげではないかと思っています。

現在、私も人事に携わる者として海外市場開拓事業部の業務に必要なスキルを人材要件定義の形に整理することを進めているのですが、協力隊OVが任期中に経てきた経験値はそうした定義に落とし込み難い。協力隊経験なしに協力隊のような特性を持つ人材を育てるのは、改めて難しいと感じています。



2025年のTICAD 9においてヤマハ発動機が出展したブース

今後に向けた協力隊への期待について

国 や世界、あるいはテクノロジー分野のトピックと対比的ですが、すべては“人”に帰結するところがあり、仕事の上で人との信頼関係の大切さは昔も今も変わりません。弊社であれば出張者が年に2、3回現地を訪ね、合計滞在期間が年間2カ月ほどというのは、現地を知って人間関係をつくるには短い時間です。いわば現地の人の代弁者・仲介者というポジションに立てる協力隊OVには、これまでも大きく貢献してもらいましたし、今後もその存在に大きく期待するところです。

単に「ヤマハ発動機の製品は性能が良いんだ」と売り込むのではなく、それを選ぶことで彼らにどう良いことがあるのかという視点で魅力を伝え、さらにそうした売り方を現地の特約店にお願いする時に「やれ」ではなく、うまく説明して一緒にやっていく。協力隊OVの方が間に入ると、より相手側の懐に入り込むようなアプローチをできているように思いますので、これからも一緒に取り組んでいければと思います。

現役隊員が任期中に取り組むとよいことなどはありますか？

前 述のように協力隊OVの方の強みは現場の肌感覚というところがあり、それは従来もこれからも変わらないと思います。加えて期待したいのは、昨今アフリカなどの途上国でも増えている、BOPビジネスに取り組むスタートアップ企業などと隊員時代から交流していただくことです。例えば、タンザニアの未電化の村落でランタンのレンタル事業を展開するベンチャー企業がありますが、テクノロジーを用いて安く採算を取るアプローチの仕方が面白く、勉強になります。

彼らのような組織の業務内容や理念、取り組みの肝といったことを任期中に知り、ご自身の知っている世界と異なる角度の課題解決方法も見聞きすると大きな財産になるのではないかと思います。他職種の隊員の活動などを見学することなども同じく有効かもしれませんが、先ほど述べたとおり、視野の広さは帰国後の仕事の中でも有用な資質になるので、お勧めです。あまり現地のさまざまな世界を知ってしまうと、弊社に応募していただけなくなってしまうかもしれませんが(笑)。

JICA海外協力隊へのメッセージ

昨今、新卒採用者の海外志向が低減しているといわれますが、幸いにも弊社には海外の、特に途上国の現場を望む方がまだ少なからず応募してくれています。そうした若者がまだ一定数いるのは事実で、特にどっぷり現地に入り込みたいという方々の受け皿として、協力隊事業があるのだと思います。

もしも協力隊という選択肢がなければ、彼らは日本を離れ、活動の場を海外に移してしまうかもしれません。そして何か国際貢献の取り組みをすることも、それが日本の看板でなく、欧米などの傘下での活動になるのはもったいない。60年間ぶれずに続いてきた協力隊事業が今後もあり続けること自体が、日本にとって大切なことではないかと思っています。

熊本県芦北町



職員が世界で鍛えた「突破力」が自治体の未来を開く



副町長

まつもと しゅんぞう
松本俊造さん

【熊本県芦北町】

熊本県南部に位置する人口約1万5,000人の自治体で、総面積の約8割を緑豊かな山々が占め、最高峰の大関山を源とする水が八代海に注ぐ。1995年度に「芦北町国際化・国際交流検討委員会」を設置して国際化への取り組みに注力しており、募金によるカンボジアでの学校建設事業などの国際協力で町を挙げて取り組んでいる。

町と協力隊事業の関わりについて教えてください

芦 北町役場からは、2001年から計4人の職員が協力隊へ現職参加をしてきました。役場からの現職参加以外の方々も含めると、町からこれまでに11人が参加。また、21年からは「グローバルプログラム(派遣前型)」(※)の実習生も受け入れています。

元来、この町には約30年間に及ぶ国際貢献・海外人材育成への協力の土壌があります。現在の竹崎一成町長が1994年に就任した際、公約の一つに「国際化」を掲げました。当時主流だった姉妹都市間交流のような活動にとどまらず、より時代に合った取り組みが必要という考えの下、町民の海外派遣やカンボジアからの研修生の受け入れ、同国に学校を建設する運動が始まったのです。学校建設の活動では町内のすべての小学生が募金活動やチャリティーバザーで寄付金を集める経験をしていて、町ではそれらの資金などをもとに、現在に至るまでに6校を“贈呈”しています。親子2代にわたって関わった経験のある町民も多く、国際貢献を無理せず自然な形で行う素地ができています。

そうした背景の中、役場職員の一人が2000年に協力隊参加を希望したことから、協力隊事業との関わりも始まりました。



芦北町の全景。八代海に面した温暖な気候で、漁業やかんきつ類の栽培が盛ん

町役場に勤務する職員が現職参加することについての印象は？

芦 北町役場からの現職参加第1号は、この町で生まれ育って役場に勤めていた寺川廣治さん(ニカラグア/村落開発普及員/2001年度1次隊)です。当時、私も同じ課の別部署に所属する同僚でしたが、彼は役場を辞めて参加する覚悟だったようです。ですが、有為の人材を失いたくないという町長の考えもあり、条例が新たに制定されて現職参加への道が開かれました。熊本県内の町村では初めての事例です。

小さな役場にとって、働き盛りの職員が2年間不在になるのは大きな戦力ダウンなのは事実です。しかし、志ある職員が外の世界を体験することは、長期的には組織のプラスになると考えています。海外での活動を通じて、町の中には身につかない視点や、「人としての大きさ」を携えて帰ってきてくれるからです。

町役場の職員には、町民の方と言葉を交わして良い関係性を構築し、困り事を理解し、町民と一緒に解決する力が求められます。自ら地域に入って行って傾聴し、課題解決案を企画し、周囲を巻き込みながら実行する。協力隊でそうした力を増して帰ってくることに期待しています。現在も職員の蓑田真平さん(ボリビア/コミュニティ開発/2025年度1次隊)が現職参加で活動中ですが、役場としては職員の希望があればいつでも歓迎。「ダメだ」などとは言いません。

ちなみに、遠い途上国に赴任することを心配されるご家族も当然います。例えば、現職参加経験者の一人である上野友晴さん(ボリビア/村落開発普及員/2006年度1次隊)は「地球の反対側に行くなんて!」とご両親から大反対されたといいます。上司が説得に当たるなどして無事に参加が実現しましたが、町のウェブサイトへ寄稿するブログ記事で彼が元気に活動している様子を知り、ご家族も安心されたそうです。昨今はビデオ通話なども一般化し、インターネット環境の充実が協力隊への参加をしやすくしていると感じます。

※グローバルプログラム(派遣前型)…青年海外協力隊・日系社会青年海外協力隊合格者の中の希望者が、派遣前訓練に先立って自治体などによる地域活性化・地方創生などの取り組みにOJT(On the Job Training)の形で参加する75日程度の研修。

協力隊経験を経て復職した職員の方から感じる特質は？

寺 川さんは彼自身が能動的だったということもありますが、帰国後は自ら町内の学校へ行ってニカラグアでの体験を報告するなどの啓発活動にも積極的に取り組んでくれました。また、前述のとおり基礎自治体である町役場で必要な資質は、協力隊で得られる能力との親和性がありますが、これまで復職した職員のいずれも、特に発想力や突破力が従来以上だった印象です。企画財政課など新たな取り組みが求められる部署を回る傾向があり、地域にいろいろな立場の方がいる中

で、新しいことを企画・プレゼンし、上手に説得しながらコミュニティへ入って働いてくれています。現在赴任中の蓑田さんも帰国後はそうした部署に勤務することになるかと思しますので、町民と関係性を築きながら、町の中心的人物として組織を束ねていける人材になっていくことを期待しています。

また、現職参加者の一人である宮本武蔵さん（ガーナ/プログラムオフィサー/2008年度4次隊）は、現在は芦北町内の地域おこしに関わる民間企業に勤務しています。現職参加後は、町役場に戻って途上国で培った力を発揮してほしいという思いもありますが、それはそれで本人の選択。町を良くしていくという仲間であることは変わりません。

協力隊員時代の寺川さん（左）と上野さん（下）。上野さんは先輩である寺川さんに刺激を受けて協力隊への参加を希望したという



今も芦北町役場に勤務する寺川さんと上野さん。「二人共コミュニケーション能力が高く、人望のある職員です」（松本副町長）

グローバルプログラムの実習生について印象的なことは？

新 型コロナウイルスの感染拡大で協力隊派遣が延期になり、グローバルプログラムが立ち上がった当時から、町では候補者の方々を実習生として受け入れてきました。協力隊を目指す方々、すなわち自身の損得を抜きに世界に貢献したいという志を持った方々を町として受け入れることにし、地域づくり活動などに参加いただきました。

これまでの実習生の方々はいずれも素晴らしい活動をされてきたと思いますが、個人的に特に印象に残っているのは、愛知県から来て実習に取り組んだ原武和琴さん（ケニア/コミュニティ開発/2023年度1次隊）です。町内にある御立岬公園という観光施設で活動していただいたのですが、とにかく明るい性格でコミュニケーション能力が高く、“逸材”というべき方でした。地域に溶け込んで積極的に動く姿勢は素晴らしいと感じて、協力隊の任期を終えたら町役場の職員採用試験を受けるように誘ったほどです。

原武さんに職員となっていただくことは残念ながら実現していませんが、彼女は今でも町とのつながりを保ってくれているようで、嬉しく思っています。

JICA海外協力隊へのメッセージ

先日、ボリビアで活動中の蓑田さんからのビデオメッセージが届いたのですが、赴任から数カ月でスペイン語が本当に上達しています。ボリビアで活動した先輩の上野さんも驚くほどで、本人の努力がうかがい知れましたし、現地の方々とも良好な関係を築いている様子でした。仕事の進め方が日本と異なる中で苦勞もあるかと思いますが、初心を忘れることなく、現地社会に貢献したいとの思いをぜひ成就させてほしいと思っています。

ODAも、何かを一方向的に与えるのではなく、現地と日本の産業を融合させた取り組みなど、新しい形に変わっていかねばならないと聞きます。その中で、より多くの国々の底上げができるようJICAには引き続き貢献していただきたいですし、協力隊員が地域に入って課題に取り組み、ひいては国全体を動かしていく起点となれればと思います。そうした意味で、今後とも協力隊には期待してまいります。

国立大学法人 鳴門教育大学



協力隊経験のある学生は リーダーシップを持ち、 周囲の学生にも 刺激を与えてくれる存在



徳島県鳴門市にある鳴門教育大学のキャンパス



副学長
(国際交流担当)

おざわひろあき
小澤大成さん

【国立大学法人鳴門教育大学】

徳島県鳴門市にキャンパスを置く国立大学で、教員養成大学として1981年に創設された。実践的な学びを強みとし、現職教員などの社会人も含めた大学院在学者が多いことを特色とする。大学院の「グローバル教育コース」は「国際教育協力分野」「日本語教育・日本文化分野」「英語コミュニケーション・異文化理解分野」「国際理数科教育分野」の4分野に分かれている。

多くの協力隊OVを受け入れてきた 経緯について

本学では、1998年から20年以上にわたり、教育分野においてJICAの短期・長期研修員の受け入れや技術協力プロジェクト、草の根協力事業など、さまざまな形で連携協力を重ねてきました。研修員の受け入れでは、99年に南アフリカ共和国の教員を受け入れて以来、これまでに63カ国から1,200人を超えるJICA研修員を受け入れてきました。

また、累計200人以上の本学教員をJICA専門家として派遣しており、国際教育協力の分野において着実に経験・知見を培ってきました。それらを基盤として2005年に「教員教育国際協力センター」を設置したことを皮切りに、国際協力プログラムの組織的実践を進め、19年には大学院修士課程に「グローバル教育コース」を設置。大学院に3年間で学んで大学院課程と学部課程の科目を併せて履修することで教員免許状と修士(教育学)の学位を同時取得できる制度もあることが特色です。

協力隊で途上国での活動を経験し、「現地で感じた・知ったことを学術的に追究したい」「修士号を取得して国際協力分野に進みたい」「現地で新たに教育分野への関心を持ち、ゼロから教員免許を取得したい」といった思いを持った方々が、大学院への進学を検討されます。本学としてもそうした方々は積極的に受け入れたく、協力隊OVの方への筆記試験免除などの対応を設けています。

協力隊を経て入学した学生の特色は？

まず多くの協力隊OVに共通して感じるのは、社会人経験者が多いことです。教育大学なので教育機関の経験がある方が多いですが、職業経験を一度経て、その上で協力隊に参加した後に本学へ入学している。前記のように現地での活動を踏まえて進学を決めているため、自身のやりたいことや追究したいことが明確にある方が多いです。社会経験があるので落ち着いていて、リーダーシップをよく発揮してくれる資質も持っている傾向があります。

また、ゼミや授業などの場において、人に興味・関心を持たせて巻き込むことにも長けています。それは途上国で現地の人々との信頼関係づくりに苦労した経験から、相手を尊重して信頼を勝ち取るための知見や技術が身についているおかげなのでしょう。

その他、予定の変更や予期せぬトラブルなどへの対応力も目立ったものがあります。途上国では予定がほごになることは日常茶飯事でしょうし、協力隊の要請も、いざ赴任してみると現場の実情が異なっているケースがあると聞きます。そのような予定外の事態に対処する経験が豊富なためか、目の前の状況に柔軟に対応しながら自分のやりたいことをうまく進めていける。そうした“レジリエンス”は一つの大きな特質ではないかと思えます。

大学院修了後の進路について 協力隊OVの特徴はありますか？

ICA専門家などになる例は少ないのですが、開発コンサルティングの道へ進む方は少なからずいて、JICAの在外拠点の企画調査員になった方もいると聞いています。最近は在外公館の専門調査員なども増えているようです。以前は修了すると教員になることが多かったのですが、ここ数年はいろいろなパターンが出てきています。もちろん従来のように学校現場へ進んでいく方もいるのですが。

すると、本学としても新たに入ってきた学生の方にさまざまなキャリアプランを示すことができる。協力隊OVの方々が切り開いたキャリアパスは現役の学部生にもアピールできている部分があって、自身も協力隊に応募したいという学生や、卒業して大使館のポストに応募してみようという学生も出てきています。教育大学ということで進路イメージが教育機関に限られがちだったので、学生の間で選択肢の多様性が増したのは本コースとしてはありがたいですね。



教授法のプレゼンテーションを行う協力隊OVの学生。日本の大学ながら、留学生が多いので英語が共通の言語になる状況も少なくないという

今後、協力隊OVに期待することは？

本学にはアフリカやアジア、中南米、大洋州などからの留学生が多く在籍していますが、協力隊経験を持って入学してきた方々は、彼らとも率先して交流している様子が見られます。留学生と話す際の共通言語は基本的に英語ですが、必ずしも隊員時代の活動言語が英語とは限らないものの、そうした方も頑張ってコミュニケーションを図っています。前述の予定変更への対応力にも関わることですが、留学生が約束の時間に来ないなどのトラブルにも冷静に「まあ、そういうこともあるよね」と受け入れて動いてくれます。

こうした背景の下、海外経験のない学生と留学生をつなぐ役割を担っているのが協力隊OVで、現地の実体験に基づく経験談も含め、彼らの存在自体が他の学生にとっても大きな刺激となっています。異文化にオープンで多様な人々と協働できる能力は、これからの社会や教育現場において、ますます重要になるのだらうと思います。



他の学生と打ち合わせをする協力隊OV。大学院のグローバル教育コースでは19年の開設から計11人のOVを受け入れてきた

協力隊OVが社会で果たす 役割についての期待は？

今後の日本社会や学校現場は、外国人を受け入れることなく持続していくことは難しいでしょう。さまざまな国籍・ルーツの人たちと関わっていく上で、協力隊OVが持つ資質や対応力が大いに生きるはずだと思います。本学がある徳島県内の学校ではまだ多国籍化が進んでいませんが、修了生の中にはそうした自治体の教育機関に就職する方もいます。協力隊OV自身だけでなく、その存在に刺激を受けた現役学生も含めた本学の卒業生・修了生が、今後の多様化する社会の中で活躍してくれることを期待しています。加えて、すでに述べたとおり、社会人経験・協力隊経験を踏まえて本学で学び、再び海外での仕事にチャレンジする協力隊OVも多く、そうした方々の国際教育への貢献も切に願っています。

JICA海外協力隊へのメッセージ

異国の地へ自ら赴き、途上国の発展を志して活動する協力隊員の方々の姿には、心から敬意を表します。慣れない環境の中では想定外の出来事や困難も多いと思いますが、一人の個人として現地の人々と向き合いながら、地域や社会の課題を見つけ、解決を目指して取り組まれていることは本当に素晴らしいことです。くれぐれも健康に留意しながら活動を続けていただきたいと思います。

そして、もしも現地での経験や気づきをさらに深めて研究したい、特に教育の分野での学び直しがしたいと考えた時には、帰国後の進路の一つとして本学を選んでいただければ嬉しく思います。

スキルや意欲で道を開く

就職 ストーリー

開発協力の現場が好きだと実感 選んだ開発コンサルタントの仕事

Text=油科真弓 写真提供=高橋晃人さん



今月の先輩

たかはしあきと
高橋晃人(旧姓 芦田)さん
バヌアツ/マーケティング/
2018年度1次隊・兵庫県出身

就職先 アイ・シー・ネット株式会社

事業概要 150カ国以上の開発途上国で、農業・水産・保健・ジェンダー・ガバナンス・民間連携など20の専門分野で実績を持つ開発コンサルティング企業。ODA(政府開発援助)事業や、現地ネットワークを活かした日本企業の海外展開支援、学研グループのグローバル展開推進など、多角的な事業を行う。

高橋晃人さんの略歴

1987年 京都府生まれ、幼少期に兵庫県に移る
2009年3月 大学卒業
2011年3月 大学院修了、MBA取得
2011年4月 通信販売会社入社
2018年7月 協力隊員としてバヌアツ赴任
2020年3月 コロナ禍により帰国(同年7月に任期終了)
2020年10月 大学院入学
2022年9月 大学院修了、情報システム修士取得
2023年5月 アイ・シー・ネット株式会社入社

大学、大学院と経営学を専攻していた高橋晃人さんが国際協力に関心を持ったのは、大学院時代に研究したソーシャルビジネスと、フィールドワークで訪れたバングラデシュでのストリートチルドレンとの出会いがきっかけだった。国際協力に貢献するためのプランを考え、まずはスキルを身につけようと、ソーシャルビジネスに取り組む民間企業に就職。障害者支援事業や新規ブランドの立ち上げなど幅広い業務を経験し、20代で管理職としてマネジメントにも携わった。大きな仕事を任せられやがいがも感じていたが、初心を思い返し30歳を迎えるタイミングで退職、協力隊に参加した。

マーケティング隊員として配属されたのは、バヌアツの水産局開発・漁業部のマレクラ島事務所。日本が草の根技術協力事業で整備した1カ所を含む、島内複数の鮮魚マーケットの経営改善が主な要請だった。島で流通しているのは牛肉と輸入鶏肉が主流で鮮魚は限られており、マーケットも赤字が続いていた。高橋さんは帳簿や売り上げデータを分析し、値つけの見直しや原価計算の導入など、基本的な体制の改善を目標に設定。根気強く指導していくことで、1年がたつ頃には、マーケットのマネージャーが自ら会議を開き改善策を提案するまでになった。

現地の人々が自律的に行動できる状態になったことで目的を達成したと判断した高橋さんは、次に企画調査員(ボランティア事業)と相談しながら首都ポートビラの省庁を回り、新たな要請を探すという異例の行動に出た。その結果、2年目は水産局本部に所属し、首都および離島の鮮魚マーケットの経営改善に取り組むこととなった。

活動の中で「途上国に、よりスピード感のある大きな効果を生み出すにはICTを活用した仕組み作りが必要



隊員時代、水産局職員にマーケティング手法、原価計算などをレクチャーする高橋さん

だ」と感じた高橋さんは帰国後はICTを学ぶために大学院へ入り直し、ICT技術を活用した国際開発の研究に取り組んだ。並行して、後に勤務することになるアイ・シー・ネット株式会社から委託を受け、同社がバヌアツで実施していたJICAの技術協力プロジェクトにも参加した。協力隊時代に同社のプロジェクトメンバーと出会い、帰国後も交流を続けていたことが縁だった。

こうした経験を通じ開発コンサルタントの仕事への関心を高めていった高橋さんは、同社への応募を決めた。「現地の人と一緒に働く国際開発の仕事を見て、改めて自分は現場が好きだと実感しました。プロジェクトリーダーの仕事ぶりや人柄に引かれ、『この人と一緒に仕事がしたい』と思ったのも大きかったです」

入社から約3年、今後は大学院での博士号取得も目指したいという高橋さん。「実務と学術研究の場を行き来しながら経験を積み、自分の引き出しを増やしていきたい」とさらなる意欲を見せている。

1 個人事業主として アイ・シー・ネットから 業務委託

2020年10月～
2023年4月

帰国後、大学院での研究と並行して個人事業主として経営コンサルタントの仕事を始めました。その一つに、アイ・シー・ネットからの業務委託があり、バヌアツでの技術プロジェクトに参加して現地にも何度か渡航しました。大学院入学時には、進路として国際機関も考えていましたが、プロジェクトリーダーから同社に誘われたこと、私自身が開発コンサルタントの仕事に関心を持ったことから、現場の社員が推薦する内部紹介制度を利用し同社にエントリーすることを決めました。

2 エントリー

2023年1月

履歴書と職務経歴書を提出しました。職務経歴書では、協力隊の経験と民間企業でのマネジメント経験を整理し、経験・知識・技術としてまとめました。

3 本部長面談

2023年2月

まずは本部長面談があり、協力隊での活動においてどのように課題解決の工夫をしたのか、具体的なエピソードなどを話しました。また、私が応募した開発コンサルタントという職種の場合、給与が完全売り上げ連動(※)であることの説明を受けました。その上で、従事する覚悟があるかどうかについても確認されました。

※現在の制度では個人の売り上げに応じた出来高制と固定給制をあわせもつ年俸制となっている。

4 社長面談

2023年3月

社長との面談では、協力隊時代のバヌアツでの活動などを聞かれましたが、面接というよりも、ざっくばらんな雰囲気での雑談をしたという印象です。社長はバヌアツの案件のプロジェクトリーダーと同期で現場にも精通しているため、現場でのエピソードなども具体的に話しました。

入社 2023年5月

現在の仕事

JICAから受注した技術協力プロジェクトの案件にいくつか携わっています。メインで担当しているのは、モザンビークの零細漁業開発に向けた水産バリューチェーン強化プロジェクトと、パラオの水産開発のためのマスタープラン策定プロジェクトの2つ。一年の半分は現地に出張しています。受注企業は1社の場合もあれば複数社合同の場合もあり、関わり方はさまざまです。現地の人も関わってくるため、業務遂行にはコミュニケーションとマネジメントの意識は重要です。私はマーケティングの専門業務に加えて、プロジェクトの副責任者である副総括の立場で、案件全体が円滑に進むよう総括と連携し、人員配置や業務の進捗管理などにも力を注いでいます。



モザンビークの干し魚市場で、水産物流通の市場調査のため販売人にインタビューを行う高橋さん

後輩へメッセージ

現役の隊員に伝えたいのは、第一に、自分の思いではなく、現地の人の思いをまず出発点にしてほしいということです。時には同期や先輩隊員の成果が気になることもあるかと思いますが、自分のペースを大切にしてください。また、とりわけ進路に迷っている人に伝えたいのは、協力隊の活動を経験すれば、自分では気づいていない成長が必ずあるということ。わかりやすいところでは異文化理解能力、語学力などですが、私自身は家族を大切にするバヌアツの人々を見て、人に対して優しくなれたと感じています。これも成長ですし、そうした変化を楽しんでください。その変化を自信にして、次のステージに挑戦してほしいです。

JICA 海外協力隊ウェブサイト
「進路開拓支援のご案内」

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/index.html



有

坂純子さんが協力隊に参加したのは2010年。ザンビア東部の地方都市カテテに村落開発普及員として派遣された。要請内容は、HIV陽性の女性たちのエンパワーメントを目的に、ザンビア農村開発省の小規模融資貯蓄プロジェクトを補佐することだった。「主な取り組みはマイクロファイナンス(※1)でしたが、実際に赴任してみると、ほとんど機能していませんでした。最初は国際機関が元本を入れましたがうまく活用されないまま、出張などの業務経費ばかりかかって資金は減り続け、100人いた融資受給者が10人にまで減少し、受給者とのミーティングも行われていない状況でした」。

そんな状況を打開しようと、有坂さんは奔走した。「省庁のトップに何度も会いに行きました。そのうち前倒しで追加資金を入れてもらえることになり、赴任後6カ月目でようやくマイクロファイナンスに本格的に取り組めるようになりました」。

そこから同僚と共に、一から仕組みを作り上げていった。「まずきちんと予算を立てて帳簿をつけ、職員同士でダブルチェックをするなど、基本的なことを徹底しただけで、うまく回り始めました。赴任当時10人だった融資受給者は、2年後には200人に。かなりの達成感がありました」

融資はHIV陽性の女性たちが優先されていた。「いつ倒れてもおかしくない、薬を飲みながら生きている女性たちが、食堂経営などでわずかな収入を得て家族を支えている。何も持たない中で融資を受けて起業している彼女たちの勇気は、私が隊員時代に最も感銘を受けたことです」

帰国した時は「アフリカで活動するのはもう十分」という気分だったという有坂さん。とにかく日本できちんと働こうと途上国支援をしている一般財団法人アライアンス・フォーラム財団に就職。偶然にもその財団はザンビアの栄養改善事業も行っていた。「最初はザンビアに短期駐在員として赴任し、その後東京に配属されました。その財団ではBOPビジネス(※2)を支援する事業にも携わりました。BOPビジネスというコンセプトは面白いものの、日本企業が途上国で成功している例はまれ。自分が挑戦してみたい!と思うようになりました」

その思いが形になったのは16年。財団を退職し、夫婦でモザンビークに移住、売り物にならない木炭^{ヴェルデ アフリカ}を再生した環境に優しい形成炭を生産・販売する、Verde Africaという会社を設立したのだ。「炭を選んだのは、アフリカの一般市民が使えるものを売りたいから。また、アフリカ各地で森林の伐採が問題となる中、持続的な形で森林保全を促したいという気持ちもありました」。

現地社員10人で工場を稼働させていたが、収益を得るには難しく現地の友人に事業を譲渡。しかし「アフリカで起業したい」という有坂さんの熱意は消えず、たまたま訪れた農村部で、新たなビジネスチャンスをつかむ。「現地の人から『マルラオイルというオイルを作っているの、日本でも売って欲しくない?』と言われたのです」。これはマルラという野生の木の果の種から採れるオイルで、果肉は生食や果汁に使われる。種子から搾るオイルは欧米では化粧品として人気

アフリカ産の高品質オイルを日本に届ける会社を起業 きっかけをくれたのはザンビアの女性たち

派遣から始まる
未来

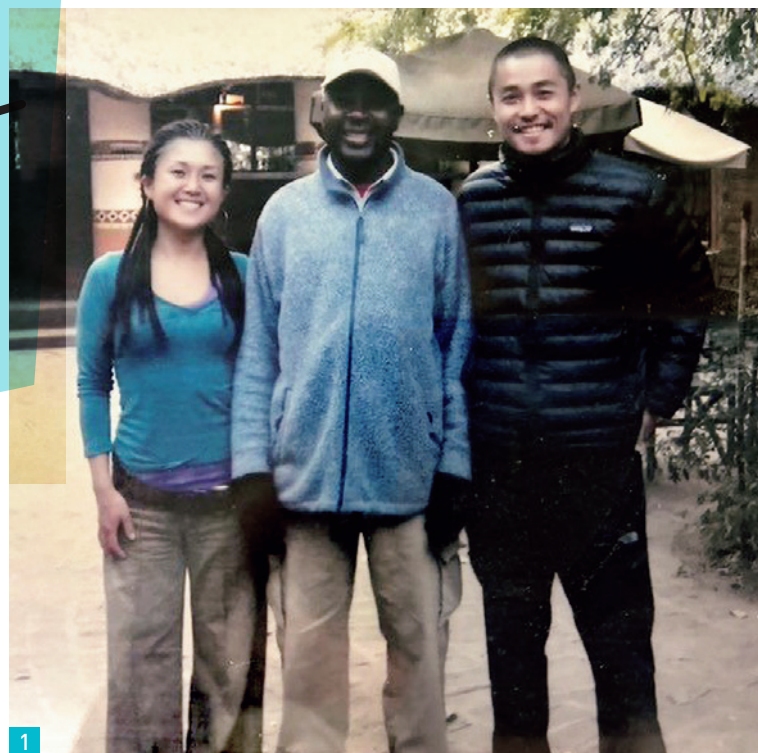
先輩隊員たちの社会還元



株式会社Verde Marulaを立ち上げ、
アフリカ産化粧品原料を輸入

ありさかじゅんこ
有坂純子(旧姓 村上)さん
ザンビア/村落開発普及員/2009年度3次隊・広島県出身

Text = 池田純子 写真提供 = 有坂純子さん



1

有坂さんの歩み

出てきていたが、日本ではほぼ知られていなかった。生産過程で実の内殻を割って種子を集める必要があるので農村女性の雇用創出につながる可能性があり、また、森林資源の持続的利用で雇用機会や収入を増やせば、森林伐採を防ぐ一助にもなると有坂さんは考えた。「Verde Africa時代の起業の目的は雇用創出と森林保全でしたから、炭とオイル、商品は違えど目指すところは一緒だと思い、21年に株式会社Verde Marulaフェルデ マルラを設立しました」。

ただ、道のりは険しく、モザンビークで有坂さんたちが生産・輸出を試みたオイルは雑菌の混入から輸出基準をクリアできなかった。混入を防ぐ技術のある工場を探したところ、南アフリカ共和国の企業に巡り合う。「現地の村落から買い取った種子でマルラオイルを作る信頼できる業者で、そこから原料を仕入れて販売することを始めました」。

会社を設立してから4年余り、現在は他にもバオバブオイルなどのアフリカ産天然植物オイルの輸入・卸販売と、自社スキンケアブランド「subi」を展開している。メインの取引先は日本の商社やメーカーで、subiの商品は日本のショップなどで購入できる。現在はマルラオイルの原料を現地の業者を通じて調達しつつ販路の拡大を進めているが、いずれは搾油も自社で行い、地域の人々の直接雇用も実現することも長期的な夢だという。「私に起業するというマインドをくれたのは、ザンビアのたくましい女性たちでした。これからも頑張り屋のアフリカの女性たちと一緒に働いていきたいです」。

- 1 協力隊時代、後に夫となる有坂之良さんと共に
- 2 生産者コミュニティの女性たちと、マルラの果汁を使ったマルラ酒を作りながら話し合う有坂さん
- 3 夏に黄色く熟れて収穫されるマルラの実
- 4 5 この種から衛生的で劣化も少ない方法で搾油された最高品質のマルラオイルを、自社ブランド「subi」の商品として日本で販売している



3



4



5



2

2005年 カナダのカルガリー大学へ入学



高校卒業後、教育系の企業で子ども向けの英会話講師として勤務。その後退職してカルガリー大学で経済学を学び、マイクロファイナンスに興味を湧き、協力隊に応募しました

2010年 協力隊員としてザンビアへ



マイクロクレジットオフィサーとして、現地の女性グループに、経済的自立を目指した収入向上のアドバイスを行いました。赴任当初、プロジェクトはほとんど停止状態でした

2013年 アライアンス・フォーラム財団でBOPビジネスに関わる



財団に就職。ザンビアの栄養改善事業のため、現地に駐在して調査を行いました。BOPビジネス支援にも従事し「炭なら事業になるかもしれない」と思いつきました

2014年 結婚。アフリカでの起業を念頭に調査を開始



協力隊活動2年目にザンビアで出会い、おつき合いしていた有坂之良さん（ザンビア/デザイン/2009年度4次隊）と結婚。新婚旅行でタンザニアやウガンダ、モザンビークなど、現地視察を兼ねて巡りました

2016年 モザンビークに移住



財団を退職し、夫婦でモザンビークに移住しVerde Africaを設立。低所得者層向けに木炭より安価で環境に優しい形成炭の生産販売を行いました

2021年 株式会社Verde Marula設立



新規に会社を設立し、代表取締役社長に就任。アフリカの天然植物オイルの輸入・卸販売のほか自社ブランドの商品開発も行き、ECサイトや日本の代理店を通して販売しています

※1 マイクロファイナンス… 貧困層や低所得層を対象に貧困緩和を目的として行われる小規模金融のこと。

※2 BOPビジネス… 社会課題の解決と持続可能な収益化の両立を目的とし、所得階層別人口ピラミッドの最底辺（Base of the Pyramid）に位置する人々に商品やサービスを提供するビジネスモデル。

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

EVENT

「第9回 全国OV教員・教育研究シンポジウム」を開催

2026年1月11日(日)、「第9回 全国OV教員・教育研究シンポジウム 協力隊を日本の文化にする ～つながろう! つなげよう! 協力隊経験のその先へ～」が、JICA市ヶ谷を会場にハイブリッド形式で開催されました。本シンポジウムは、全国OV教員・教育研究会(※)とJICAの主催で、文部科学省、東京都教育委員会、全海研などの後援を受けて実施されました。当日は、協力隊OVの教員をはじめ、現役隊員、派遣予定者、協力隊希望者など約90人が参加しました。

帰国隊員の高木大作さん(カンボジア/体育/2021年度7次隊)による実践発表に続き、テーマ別グループワークでは、国際理解教育や教科学習における協力隊経験の活用方法について、参加者同士が積極的に意見を交わし、次世代の学びにつながるネットワークづくりの場となりました。

詳細はこちら



※教育関連職種のOVを中心に構成され、協力隊での経験を教育現場で生かすために活動している会。



シンポジウム後の記念写真

NEWS

「世界の笑顔のために」プログラムの物品送付状況



2025年度は「世界の笑顔のために」プログラムへのご協力を賜り、ありがとうございました。今回も全国各地よりご寄贈いただいた合計3,778点の物品を38カ国へ送ることができました。

26年度も同プログラムを実施予定です。日程や寄贈対象となる物品をなるべく早くご案内できるよう現在調整中です。



詳細はこちら



EVENT

青年海外協力隊事務局が朝日新聞社主催 Reライフフェスにブース出展

去る2月22日(日)、23日(月)に東京国際フォーラムで開催された「朝日新聞 Reライフフェス2026」において、青年海外協力隊事務局が「JICA海外協力隊」ブースを出展しました。

会場にはシニア世代を中心に幅広い層の方々を訪れ、両日ともOV各1人が自身の経験や活動内容を紹介。協力隊の取り組みについて理解を深めていただく機会となりました。



JICA海外協力隊ブースの様子

編集後記

P22「あの日、地球の、あの場所で」の古市啓子さんが活動したスースは、首都へ行くのに使える手段が鉄道のみ。初めて乗った時は自身の指定席が占領されていて面食らったものの、「現地ルール」にすぐなじみ、チュニジア人顔負けのアグレッシブさで席取りに奔走していたそうです。安全第一ですが、隊員としてたくましさは大事ですね。(飯淵一樹)

P4-7「派遣国の横顔」で紹介した半田さんの任地は標高2,000m級の山岳地帯。かつて山岳部で鍛えた技術と体力があってこそ、活動に差し支えなかったそうです。大人のための識字教室を開き、帰国後も支援の形を拡げながら30余年継続され、2023年には駐日ナパール大使から感謝状を贈呈されました。敬服する限りです。(阿部純一)

クロスロード

[2026年4月号]

第62巻第3号 通巻714号
発行日: 2026(令和8)年4月1日

編集・発行: 独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

制作協力: 一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7 昇龍館ビル2階
デザイン: 亀井敏夫
印刷・製本: 弘報印刷(株) 校正: 佐藤智也

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。
アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



- 本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。
- 本誌に掲載されている記事等の内容は、協力隊員(OV含む)の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

『クロスロード』は、
JICA海外協力隊の
ウェブサイトでも公開しています。

<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



JICA 海外協力隊派遣現況

2026年2月末現在

現在の
派遣国数

74カ国



アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	36	1
エチオピア	16	
ガーナ	33	
ガボン	11	1
カメルーン	19	
ケニア	41	1
ザンビア	38	
ジブチ	8	
ジンバブエ	17	
セネガル	29	3
タンザニア	32	
ナミビア	11	
ベナン	16	
ボツワナ	18	1
マダガスカル	36	
マラウイ	31	
南アフリカ共和国	7	
モザンビーク	13	1
ルワンダ	30	1

アジア地域

国名	一般	シニア
インド	18	
インドネシア	28	
ウズベキスタン	15	
カンボジア	33	
キルギス	35	1
ジョージア	15	
スリランカ	15	
タイ	39	1
タジキスタン	6	4
ネパール	24	3
バングラデシュ	2	
東ティモール	25	
フィリピン	23	
ブータン	23	1
ベトナム	36	
マレーシア	20	2
モルディブ	6	
モンゴル	28	1
ラオス	51	2

大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	4	
サモア	12	
ソロモン	25	1
トンガ	16	1
バヌアツ	22	
パプアニューギニア	14	
パラオ	24	3
フィジー	8	1
マーシャル	13	2
ミクロネシア	22	1

欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	8	

中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	23	
チュニジア	10	1
モロッコ	26	
ヨルダン	19	

中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン	7	12	1	
ウルグアイ	3			
エクアドル	23	1		
エルサルバドル	26			
キューバ		2		
グアテマラ	19			
コスタリカ	33			
コロンビア	23	2		
ジャマイカ	9			
セントルシア	18	1		
チリ	6	1		
ドミニカ共和国	24	1	6	
ニカラグア	16			
パナマ	18	1		
パラグアイ	26	4	6	1
ブラジル			48	
ベリーズ	12			
ペルー	41			
ボリビア	52	1		
ホンジュラス	21			
メキシコ	8	2		

合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	1,505 (558/947)	60 (44/16)	72 (24/48)	2 (2/0)	1,639 (628/1,011)
累計 (男性/女性)	49,306 (25,727/23,579)	6,754 (5,452/1,302)	1,698 (658/1,040)	557 (258/299)	58,315 (32,095/26,220)

一般 = 青年海外協力隊/海外協力隊 シニア = シニア海外協力隊 日系一般 = 日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊 日系シニア = 日系社会シニア海外協力隊 (単位: 人)

あの日、 地球の、 あの場所で。

任地の思い出を聞きました。

暑く乾燥したチュニジアでの暮らし 現地で感じた味覚の変化

ふるいらけいこ
古市啓子さん

チュニジア/コミュニティ開発/2021年度3次隊・静岡県出身

私が活動したチュニジア第3の都市・スース市は、夏場は気温が40℃台に達し、年間を通して雨が少なく乾燥した環境です。かんがいされている場所以外は草も生えず、乾燥に強いオリーブやかんきつ類が栽培されている程度。少し内陸に行くと、土壌の塩分濃度が高くて何も育たないため養鶏くらいしか生計手段のない地域もあります。

厳しい環境という感のある任地ですが、その分、日本よりずっとおいしく感じる物が多くて印象的でした。例えば果物は大地に含まれる水分が少ないせいか実の甘味が凝縮されていて、特に日本では見かけない平たい形のモモは本当に美味でした。

また、活動で訪ねる農家の人たちが出してくれるのは、蜂蜜や砂糖がたっぷり入った手作りレモネード。私は甘い物が好きではなく、このレモネードも

当初は甘過ぎると感じていたのですが、現地の暑さの中では不思議とおいしく感じられて私の常備品に。同僚が作ってくれたイチゴのジュースも本当においしかったです。

そして、炭酸飲料やアイスクリームの類も元々好きではなかったのですが、任地の夏にはよく合いました。冷たいアイスやシュワシュワした炭酸が炎天下の喉を潤し、ひと息つかせてくれたものです。チュニジアには全般的に甘いものが多かったのですが、それは南部のサハラから熱風が吹く国ならではの味覚だったのかもしれない。

帰国した今、すっかり味覚は元通り。当時飲んだサイダーはなぜあれほどおいしいと感じたのだろう?と自分で不思議に思うほど。ただ、現地のモモの味は忘れられず、また食べたい!と思う毎日です。

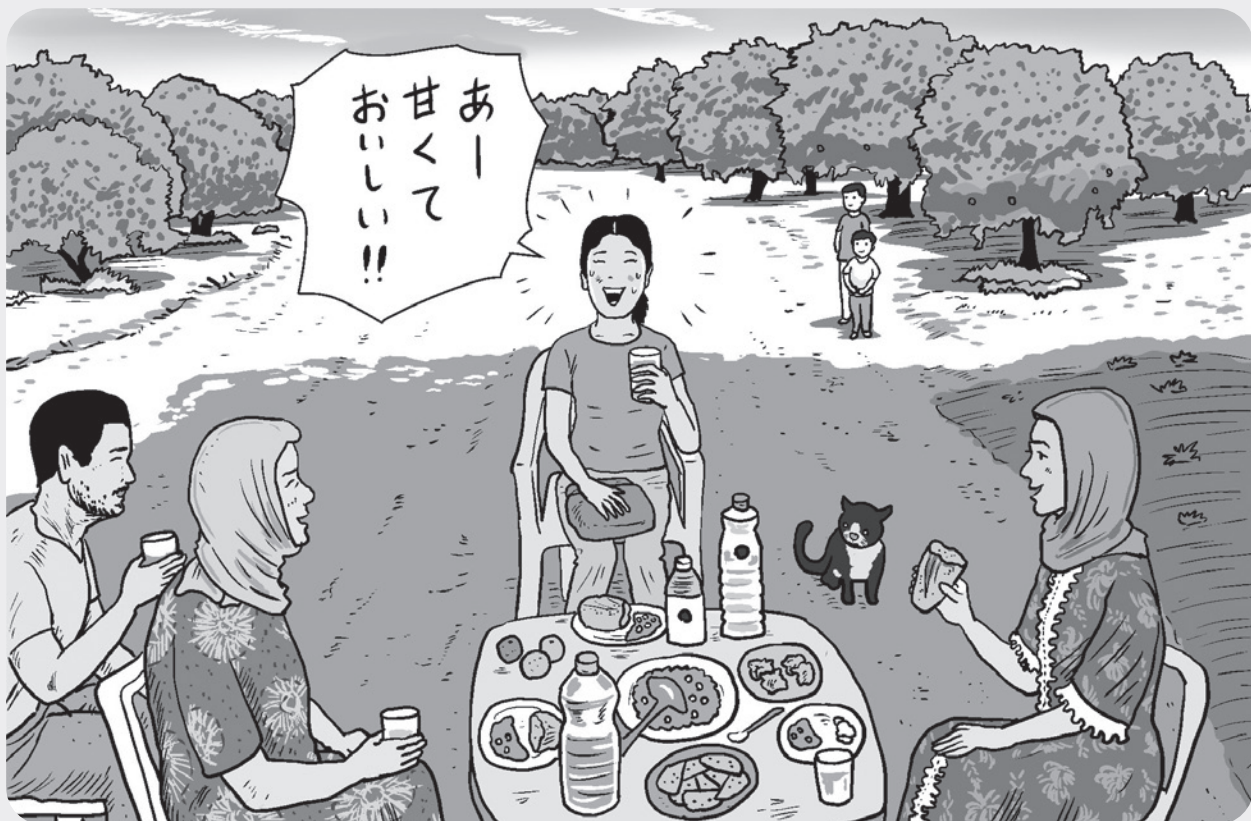


Illustration = 牧野良幸 Text = 飯淵一樹 (本誌)

任地の食生活に彩りま!

隊員 めし

今月の料理

パラグアイ隊員から教わりました!

ほろほろとした食感が魅力の菓子 アルファフォーレス

教える人



木村笑里子
(旧姓 成田)さん

パラグアイ/家政/

1987年度1次隊・秋田県出身

短大卒業後、学生寮の厨房やレストランでの勤務を経て協力隊に参加。帰国後は結婚し、夫の赴任先であるブラジルで4年間を過ごす。その後、子育ての傍ら学校給食業務に勤務した。



隊員時代、先住民が多く暮らしているパラグアイ西部チャコ地方で料理講習会を開いた木村さん



農村の女性たちを対象に保存食作りや編み物作品の発表会を行った時の一枚



材料 (12個分)

〈生地材料〉

薄力粉	55g
コーンスターチ	95g
ベーキングパウダー	小さじ1/2
バター(無塩)	60g
粉糖	50g
卵黄	1個分
レモンまたはライムの皮すりおろし	1/2個分
打ち粉(薄力粉など)	適量
ココナッツファイン(※)	適量

※ココナッツファイン…ココナッツの実を乾燥させ粗く砕いたもの。ザクザクとした食感と甘み、ほのかな香りがある。

〈ドゥルセデレチェ材料〉

※ドゥルセデレチェ(キャラメル色のミルクジャム)は市販のものが手に入れば1瓶。

砂糖	100g
牛乳	500ml
重曹(省略可)	小さじ1/2
バニラエッセンス(省略可)	小さじ2

レシピ

〈生地を作る〉

- ① ボウルに室温でやわらかくしたバターと粉糖を入れ、白っぽいクリーム状になるまでヘラなどですり混ぜる。
- ② ①に卵黄をスプーン1杯ずつ加えてその都度混ぜ、次にレモンの皮も加えて混ぜる。
- ③ 薄力粉、コーンスターチ、ベーキングパウダーを合わせ、ざるでふるいながら②に加えて混ぜ、ひとまとめにしてビニール袋に入れ冷蔵庫で30分休ませる。生地がまとまりづらいつ時は休ませる前に袋の中の生地を手のひらで何回か押しながらかまとめると徐々にまとまってくる。
- ④ オープンを150℃に余熱しておく。
- ⑤ 生地をめん棒で4~5mmの厚さに延ばし(適宜打ち粉を使う)、直径4cmくらいの丸い抜き型(小さめのコップで代用可)で抜き、クッキングシートを敷いた天板に並べてオープンで20分ほど焼く。あまり焼き色をつけず白く仕上げるとよい。

〈ドゥルセデレチェを作る〉

- ① 鍋に牛乳、砂糖、あれば重曹とバニラエッセンスを入れ、火をつける。沸騰したら弱火にして常に鍋底からかき混ぜながら、1時間ほど温める。煮立たせると膨張してあふれるので注意する。
 - ② 硬いクリーム状になり、鍋底にヘラで筋をつけるといつまでも残るくらいの硬さになったら、火を止める。あまり硬くなるまで温めると、冷めた時にカチカチに硬まるので生地にのせた時に垂れない程度の固さでよい。
- ※市販のキャラメル40個(約180g)を牛乳100mlで煮溶かし、クリーム状になるまで煮詰めてもできる。

〈仕上げ〉

生地の片面にドゥルセデレチェを塗り、もう1枚でサンドして、ふちにココナッツファインをまぶして出来上がり。

料理について /

パラグアイでは小さな子どもの誕生日祝いが盛大に行われていて、そんな時に供されるタマゴボーロのようなほろほろとした食感のお菓子です。レシピではドゥルセデレチェを挟みましたが、グアバジャムを挟むのも一般的です。これはコーンスターチを使うお菓子ですが、トウモロコシの粉はよく料理に使われ、塩味のケーキのような料理「ソパパラグアージャ」もトウモロコシ粉を使ったパラグアイの伝統的な国民食です。



公開!

私の派遣国生活

[セントルシア]

写真提供 = 西田豊和さん Text = 阿部純一(本誌)



にしだ とよかず
西田豊和さん

経営管理 /

2024年度3次隊・東京都出身

暮らしている市、町、村



カストリーズの街並み。奥には停泊中の大型クルーズ船が見える

セントルシアは南米カリブ海に浮かぶ、日本の淡路島ほどの小さな島国です。任地である首都カストリーズには、カリブ海巡りのクルーズ船が多数来航し、多くの観光客で街がにぎわいます。公用語は英語ですが、かつてフランス統治が約100年間続いたこの国の人々は、その時代から育まれたフランス語由来のクレオール言語(※)やクレオール料理といった文化を大切にしています。

※クレオール言語…異なる言語圏の人々の交流の中でできた共通言語が、世代を経て母語として話されるようになったもの。言語だけでなく、文化が混交した様式をクレオール料理、クレオール建築などと呼ぶ。



上: 森林関連部門の同僚たちとのレクリエーション

左: カストリーズの至る所にある街中アートを眺めながら散歩するのが西田さんの楽しみの一つ。写真は世界遺産にもなっているピトン火山を描いたアート



住まい

家具付き賃貸住宅の1階で、間取りはダイニングルーム、ベッドルーム、キッチン、バス・トイレ。セントルシアは6~11月が雨期で突然の雨に悩まされるのですが、そんな時期のために部屋干しができるランドリールームがあります。家は港から徒歩8分の小高い丘の上であり、洗濯物を干している庭から海が眺められることが気に入っています。

上: ランドリールームは雨期が長いセントルシアならではの設備

下: カストリーズの沿岸部は官公庁街になっていて、西田さんは歩いて通っている



活動の様子

活動先はセントルシアの農業省(※)です。省内の各種部署・部門を数カ月サイクルで移り、現場の課題解決に取り組んでいます。この国ではまだ手書きの伝票や帳票が多いため、パソコンで簡単なデータベースを作成する提案などを行っています。日本の製造業の現場で培われてきた5Sなどの手法を生かし、改善活動を進めています。

※農業省…配属先の現在の正式名称は、セントルシア農業・水産・食の安全・持続可能な開発省 (Ministry of Agriculture, Fisheries, Food Security and Sustainable Development)。西田さんは主に農業分野の各部門で活動している。



エンジニアリング関連部門での活動が終わり成果報告会を行う西田さん

食べ物

セントルシアでは総じて物価が高いため基本的に3食自炊です。食材は地元市場や大手スーパーで買いますが、物価は日本の2~3倍で、例えばキャベツ1玉が約1,000円します。食材の入荷が途切れることもあるのは島国ならではの、1800年代からセントルシア人の先祖が貴重なたんぱく源としてきたタラなどの魚の塩漬「ソルトフィッシュ」が代表的な国民食です。



上: ソルトフィッシュをグリーンバナナと炒めた西田さんの自炊料理
下: もつぱら3食自炊の西田さん。弁当のサンドイッチは週末にまとめて作って冷凍保存する。夕食のカレーや焼きそばも多めに作って冷凍しておき、弁当にしている



JICA海外協力隊
応援基金
皆様からの応援
お待ちしております



青年海外協力隊事務局
公式Instagram
JICA海外協力隊のリアル
お見せします



JICA_KYORYOKUTAI

JICA海外協力隊
公式LINEアカウント
シゴト診断、教えて! FAQ
などぜひ活用下さい

